

つまり、何がしたいかというと、人間ていうのは、生まれながらに、絶対的に信頼し合い、絶対的に忠誠を持つような環境のもとで生まれて、そこから親離れしていくうちに、やはり同じように、絶対的な安心感というか、充足感というか、それを求め続ける性質を持つているんじゃないかな、ということ。

「グルイズム」を否定する風潮があるけれど、それは間違いだと思う。一つのものに没頭してしまうこと、突っ込んだ考え方をしてしまうことは、たいへん危険な考え方だとよく言われているけれども、僕は違う。「グルイズム」を否定しない。なぜなら、僕たちはもともと赤ちゃんのときに、母親に対する「グルイズム」という中に存在したし、それを求める性質というのは、人間というか、魂の性質としてあるべき姿だと思うから。

むしろ、現代の風潮として、「広く浅く」物事を知りたいというのがあると思うんだけど、そっちの方がもっと危険だと思う。それよりも、「これは真実だ」と思ったものに対してより探求して、その精神世界における極みを達成した方が、すべてを知り得ることができると思う。

「広く浅く」物事を見ていこうとしている人たちは、単に貪欲な自分というものが存在しているだけであって、結局何も得ることができないと思う。

「尊師にボアされてもいい」

—— いじわるな質問かもしれないですけど、そういう「グルイズム」を抱いている高崎さんに対して、高崎さんのグルである麻原さんが、「おまえの魂の進化のために、おまえをボアする」と言ったらどうしますか？ たとえば、落田耕太郎さんのように首を絞めることによって、あるいは毒ガスによってでもギロチンでも十字架でもいいんですけれども、「おまえは死ね！」と麻原さんに言われたら？

高崎 ああ……。有無を言うことのできない状況だったら、いたしかたないと思う。もし、私が尊師に問い掛けるだけの条件が与えられているならば、「なぜ私はそういうふうにならなければならぬんですか」と問い掛けると思う。それは、イエス・キリストが十字架に架かる前に、天の神に問い掛けたときと非常に似た気持ちだと思う……。

—— じゃあ、麻原さんの説法にあるように、「高崎は生かしておく」と悪業を積んで、苦しみの世界に落ちてしまうから、悪業を積む前に生命を絶ってしまうんだ」と言われたら？

高崎 尊師がそうおっしゃるんだしたら、これもいたしかたないと思う。

ただ僕は、そのときに過去を振り返るね。で、自分は本当にまっとうな生き方をしていたのだろうか、悔いのない生き方をしたのだろうか、それを走馬灯のように振り返るだろうね。で、願わくば、今度生まれてくるときは、もっと強く、心の豊かさをもって生まれてきたいと願うよね。

—— それで死ぬわけですね。自分の生命まで捨ててしまうと……。

なぜそんなに麻原さんが「正しい」と思い込むのですか？「正しい」と思う根拠は？

高崎 それは自分の過去において繰り返してきた過ち、乗り越えられなかった壁、それはたくさんあるんだけど、それはすべて自分の煩惱や汚れのせいなんだけど、その煩惱を破壊するための教えというものが、尊師の法則の中に様々な角度から克明に説かれていた。それを実践することによって今まで生きてきた中で感じた問題をすべて解決できたし、

それで自分が進化しているという確信はある。

私は教えを乞う側であり、「教えを乞う」ということは、自分は完璧でないわけで、煩惱や汚れの多き魂であると。そうであるならば、今後も修行を積んでいかなければならないし、汚れを浄化していかなければならない立場であるし、深遠なる法則も完璧には理解していない。しかし、少なくとも私が経験し得た精神的な体験のプロセスは、尊師が説かれた法則から自分が開花させていったものであることは間違いないし、この延長線上に絶対的な真理っていうのは存在するんだなっていうことを、その道を歩いてきた者として断言できる。尊師はそういう光を与えてくださった存在なんだ……。

——じゃあ、麻原さんはどうして「最終解脱者」と言えるわけ？ 「最終」とだれが言えるわけですか？

高崎 「仏教には最終なんてないんだ」って、ある評論家が言っていたのを聞いたことがある。それは尊師の教義を理解していない浅はかな反論だと僕は思っているんだけど……。

尊師は「最終解脱」をされたって言っているけれど、絶えず「私の修行はまだ終わっていないんだ」とおっしゃっていた。つまり、「すべての魂がマハー・ニルヴァーナに入るまで、私の修行は続くんだ」というのが尊師の真意。

尊師がおっしゃったのは、まず、尊師の意識が完全にマハー・ニルヴァーナに移行したと。完全に「空」の状態を獲得したと。これは、絶対的な自由・幸福・歓喜であつただけで、これはマハー・ニルヴァーナに到達しただけであつて、これからその器というものを大きくしていくと。これは何かというと、すべての魂の煩惱を背負い、すべての魂の苦悩を破壊し、この欲六界、色界、無色界を破壊し、すべての魂をマハー・ニルヴァーナに入れるまで修行を続けるんだと。

つまり、尊師自身はマハー・ニルヴァーナの状態を獲得しているんだけど、すべての魂をマハー・ニルヴァーナに入れるまでは修行を続けるんだとおっしゃっている。ステージとしては「最終」だけど、修行は終わっていないということなんだよね。

——まあ、それは言葉上の問題だからもういいでしょう。

高崎さん個人の問題では、具体的にどういう変化をしたのですか？

高崎 愛つてことに關してよく子供の頃から考えていて、その愛っていうものが恋愛の中にあると考へて、いろんな人と恋愛關係に陥つた経験があるけれど、最終的にオウムに入る前に付き合っていた彼女と「愛って何だろう？」ってお互い考へていた。だけど、「僕たちはお互い愛し合っている」といつているにもかかわらず、お互い足を引っ張り合ひ、傷付け合っていたと。そういう時期があつたんだよね。

もし愛があるなら、彼女のやることをすべて受け入れなければならないという包容力を持たなければならぬ。にもかかわらず、いろんな男友達と遊んできたとか、抱き付かれてしまったと、そういうことを聞くと、それに対して非常に嫉妬心が出てきて、「君は僕が求めた恋人じゃない」とか「それは愛を誓い合つた君の姿じゃない」とって、どんどんエスカレートして、喧嘩になつてしまつた。そういうことに明け暮れた毎日だつた。

それで、「一体愛ってどこにあるんだろう？」ってもう完全にわからない状態だつたけど、麻原尊師の教えの中に、真実の愛、あるいは慈愛というものの存在を知つた。それは、愛っていうのは、本質的に相手が心の成熟をするならば、自分がどのような目

に遭っても、どのような不利益を被っても、相手が成長することを願ってあげられることである。

で、尊師が絶えず発願されている愛は何かというと、すべての魂を絶対的真理の世界へ導くこと。それは、すべての魂の苦しみを自己の内側に内在し、そして私が苦しむことによって、この世界の煩惱を破壊して、地獄の住人も、今イモムシである魂も、すべての魂をマハー・ニルヴァーナ（大涅槃）に入れて、その最後の魂を見届けてから、自分もマハー・ニルヴァーナに入っていこうという……。もう、なんか途方も無いくらいの発願……

途方もないっていう、抽象論でごまかされているって人は言うかもしれないけれど、でもそこまで言える人なんて僕は知らないし、他人の苦しみを背負ってやろうってね、ニコニコと、おおらかに、そこまではつきりと言葉の曇りもなく言える人なんて僕は出会ったことなかった。

そして、たとえ主宰神のシヴァ大神の命令によって地獄へ突き落とされたとしても、シヴァ大神の命なら喜んで行きましよう。そして地獄の住民を救済するんだと。そこまで言うことができるのかと……

その四無量心を体現した尊師に少しでも近づきたいと、涙を流しながら思った。

——つまり、高崎さんは、誰がどう言おうと麻原さんは救世主で、付いていくつもりとということですね？

高崎 うん。それから、尊師の実態ってものを、みんなよく知っていないって思うね。

僕は音楽をやってきたからよくわかるんだけど、たとえば声の質、これはまさに七変化で、非常に表現豊かなものだよね。それに音域、たいへん低い声からたいへん高い声まで出すことができた。これは少なくとも教団一だったと思う。それで、それ以上の声を私は知らないんだよね。いたら教えてほしいと思ってる……。僕の知り得た中ではないなかつたけど、あそこまで深みがあつて、パワーがあつて、力強く、しかも音域が広いという声を聞いたことがない。

それに尊師の早口。これ以上早口で話せる人を世間で見たことがない。早くしゃべる、ゆっくり丁寧に話す、これが自由自在と。早く話するときのスピードたるや、もうとても考えられないくらいの速さで、その思考の速さには追いつけない。それ以上の人物を見たことがない。いたら教えてほしい。

当然、作詞・作曲された歌やクラシックも聞いてほしいし。音楽に対する好き嫌いを忘れて聴くならば、必ず素晴らしい曲だと、たいへんなヴァイブレーションだと感じると思う。やさしく、慈愛があり、四無量心とはまさにこのようなものだと思うものばかり。自然と心が動かされ、たいへんな精神的な高揚を体験することができる……。

たくさんの弟子たちを従えて、威厳を持ち、法を垂れると。「これはこうである」と淡々と説法する、そういう姿勢そのものが全く揺るぎないものであるし、「弟子たちに成長してほしい」と、「すべての衆生に利益を与えたい」という思いが漲っている。言葉に曇りがない。その姿、声そのものが四無量心の現れだと思う。もう、あらゆる輪廻転生、魂の流転、大いなる宇宙観・仏教観を見通した者でしか言えない威厳さを絶えず放っている。

肉体的レベルにおいても、一番激しい修行をされていたのは尊師だったし、力という点

からみても、尊師以上の怪力を見たことがない。

——それは麻原さんより力の強い人はいるでしょう？

高崎 それはいるかもしれないけれど、少なくとも教団内ではトップだった。本来ならば格闘技のチャンピオンになってもいいような中村昇さんとか（彼は若い頃はプロレスラー志望だったんだけれど）、そういう人たちと相撲をやってみてもびくともしなかった。実際、若い頃は極真空手の城西支部で最も怪力だったというし……。

つまり、いわゆる気の力も使ってすべてをはね除けていたよね。これ言っているのかどうかわからないけれど、奥さんのヤソーダラー正大師が修行で精神的に追い詰められて、ナイフで刺そうとしたんだけれど、折れちゃったこともある。

——本当に？

高崎 うん。

その他に、ドラムカンの中いっぱい水をに入れて、具をたくさん入れて、カレーを作ったときがあるんだけど、それをわしづかみしてグツツと持ち上げてしまったこともある。二百五十キロはゆうにあつたと思う。

それに、ここまで解析力を持って、頭脳の中に整理されたかたちで、これだけの深遠な法則をすらすらと、目が見えないにもかかわらず、説いてしまう人を見たことがない。「いたら教えてくれ！」と言いたいね。

お一人でこういう能力を持つてらっしゃるわけだから……。これだけ魂のスケールが大きい人を見たことがない。僕も最初は自分の汚れによって疑念があつたけれども、時が経つにしたがつて、単なる思い込みじゃなくて、確信はどんどんどんどん大きくなっている。

——わかりました。高崎さんがそう思い込んでしまったのならどうしようもないですね。僕は何も言うことができません。

でも、高崎さんは一途になりやすいところがあると思う……。

法廷での麻原さんの姿を、先入観なしに見たらいいですよ。

それから、もつとたくさんの人の意見を聞いた方がいいですよ。高崎さんが発言することによって、いろいろな人からリアクションがあるでしょうから、それに耳を傾けてください。

高崎 うん、そうするつもりだよ。

三章 未来について

ハルマゲドン

——これから高崎さんはどうやって生きていこうと思っているわけですか？

高崎 私の生命ある限り、生涯かけて、「麻原尊師は救世主だ」ということの証明、それを示さなければならぬ。それは私自身の役割であり、その背景には、やはり私自身のエゴとの闘いであり、自己の煩惱との闘いであるし、いかなる現象に対しても屈伏しない精神状態、大いなる覚醒を今以上に得なければならぬと思う。

私の言動そのものが、多くの人たちに、特に信念を持って生きていく多くの人たちに、利益をもたらすようになりたい。その人たちが本当の心の解放を得るための一つの材料になるならば、こんなにうれしいことはないし、それを全力で実践したい。そして、僕はそのため生涯かけたいと思う。

それから、麻原尊師がなさったことをいかに忠実にみんなに知ってもらおうかということ。それが、私の役目だと思う。

——未来についてはどう考えているのですか？ 麻原さんは間違いなく極刑になると言われていますけれど。

高崎 未来ってというのは、私たちの心の働きで、いくらでも変えられる。

世の中の価値観、世論というものは、今はこういうかたちで存在しているけれども、五年前、十年前、二十年前、五十年前、百年前と考えるならば、もうとんでもないぐらい変わっているよね。世界の価値観を考えてみても、日本では受け入れられないことが受け入れられたりしているし、考えられないことが世界中で展開されていると。

こういうことを考えてみてもわかるように、私たちの社会的通念、道義的な価値観も今と完全に変わってしまう可能性があるし、その未来ってというのは、私たちの心の働きにかかっていると思う。

だから、この日本を支配している憲法自体は永遠なものじゃないと思うし……。そういう意味では樂觀している。

——じゃあ、たとえば麻原さんが獄中から出られると思っているわけですか？

高崎 いずれ、また弟子として、以前のようにお会いできるときが来ると思っている。

——もし、麻原さんが獄中で亡くなるなり、死刑になってしまったとしたら、高崎さんはどうします？

高崎 うーん。正直なところ、そうなってほしくない。というより、そんなことを考えてもしようがないというか……。実際にそうやってみないと、僕がどう感じ、どう行動するのかわからないよね。

——ハルマゲドンはあると思います？

高崎 ええ、当然。

それは、私たちがこの地上でなしてきた、すべての悪業、悪因というものが集中的に現象化する時期だろうと。

自分の利益、利潤とものを求めて様々な生態系を破壊してきたし、種族を絶滅してきた。その悪業の因が目に見えないかたちで、積もりに積もってきた。それが一気に解放されるのが、「ヨハネの黙示録」に書かれているハルマゲドン。

そして、その後、精神世界と科学が融合した新しい世界が始まると思う。それが西洋神秘主義でも言われている「水瓶座の時代」だ。

—— 麻原さんは、破防法適用の弁明で、「九五年十一月、イスラエルのラビン首相が暗殺され、ハルマゲドンのプロセスは終了した」って言ってますよ。

高崎 ハルマゲドンの「一つの」プロセスっておっしゃったんでしょう。だったら、次のプロセスがあると思う。

で、間違いなく、世の流れっていうのは、水瓶座の時代、アクエリアスの時代、千年王国の時代。そういう時代が到来するのは間違いない。これは私が何を言おうが、そういう時代が来るのは間違いない。

だけど、その時代の移り変わりにおいて、大いなる試練は避けられない。それは第三次世界大戦かもしれない、ハルマゲドンかもしれない。これはオウムに関わるうが関わらまいがいずれ起こることなんだよ。

—— もし今後、麻原さんから「サリンを撒いてこい！」って言われたらどうしますか？
高崎 ……。それはさっきと同じで、実際に自分がその立場に置いてみないと、自分がどういう行動をするかわからない。「いやだ」といって逃げ出すことはまずないけれど、本当にその必要性があるのかどうか見極めようとする努力はすると思う。

そして、自分の中で疑問が湧いたらぶつける。当然こういうことは、グルが弟子の力量を見極めて指示してくるもんだと思うけれど。今まで私にそういう指示をされなかったというのは、それだけの力量が私になかったから指示されなかったんだと思う。そのへんの尊師の見極めっていうのは、天才的とも言うべき弟子たちの使い分けをしていたし……。

実際、逃げ出す者が誰一人としていず、実行しちゃったわけだから。

—— その後、反旗を翻した人がたくさんいますよ？

たくさんいるって、世の中では言われているけれど、逮捕されている人たちの中で、いまだに信仰を持ち続けている人って相当いると思う。報道も選り分けられていると思うんだよね。教祖の批判だけおもしろおかしく報道されていて、実際は信仰心をバリバリに持っている人たちを、僕はたくさん知っている。

—— それは誰ですか？

高崎 新実さんであるとか、土谷さんであるとか……。H・Jさんなんかも断片断片で批判していると言われているけれど、実際はそうでない。これを見てごらんよ（巻末・参考資料④参照）。

で、逮捕されている人たちの中で、末端のサマナでも、信仰を持ち続けている人はたくさんいると思う。

現教団を批判

—— 破防法が適用されないことになって、「オウム真理教」という宗教団体は、しばらく存続するようになりましたけれど、その教団にまだ残っている人たちに対して言いたいことはありますか？

高崎 教団から出てから、他の宗教は一体何を求めようとしているのか、僕なりに調べたんだよね。イスラム教とか「エホバの証人」の信者の人たちと会って話を聞いてみた。そこで得た結論なんだけど、向かおうとしているベクトルは同じであると。ただその方法論

が違っていて、いろんな宗教によって、その方法論に問題があるかもしれないけれど、ただみんなが辿り着こうとしている世界には共通したところがあるなあと。

それは教義という観念によって、「おまえとは違う」とか「おまえとは暮らせない」と言ったりするけれど、でも、人間が本来求めるべき道というのはみんな同じだと思う。

——でも、オウムの教義では、オウム以外の宗教のことを「外道」といつて否定してききましたよね。

高崎 「外道」というのは、お釈迦さまも言ったように、仏道修行を歩まない、他の信仰、他の修行を実践している人という意味に過ぎない。「凡夫」という言葉も、修行をやっていない普通の人という意味で、決して差別用語ではないんだよね。尊師も淡々とそうおっしゃっている。

だけど、今の教団の人たちは、それに差別意識、嫌悪、自と他の区別というような意識を乗けてしまったように思う。オウムの教団にいる人たち以外に対して、見下すような態度や心の働きが少なからずあったと思う。私自身そうだったし、今後徹底的に悔い改めなければならぬと思っている。ザンゲしなければならぬと。

本質的には、魂というのは一緒なわけだし、魂の流転において、いつまた転倒してしまいかもわからないし、魂の価値なんて、現時点で善悪を判断できるものじゃない。仏教でも、すべての魂に「仏性」が宿っているといっているわけで、で、本質的に同じであるならば、差別的な意識、他に対する嫌悪というのは、悪魔であろうが敵であろうが、すべて四無量心によって接するべきであるという原点に立ち返らなければならないと思う。

たしかに、今まで修行する上で、そういう壁つてもものは必要だったかもしれない……。つまり個の解脱という意味においてね。でも、もうその段階は超えなければならない時期だと思う。

——じゃあ、今の教団の閉鎖的で排他的な在り方には批判があるんですよね？
高崎 疑問に思う点はある。

それに、階級制度だね。まず、正大師がいて、正悟師がいて、師がいて、サマナがいて、その下に信徒がいてという、ピラミッド型の構造になっているけれども……。

階級制度っていうのは、発足当時は必要だったと思うんだよね。組織として成立させるために、この人はここまで教義を理解しているんですよ、という順列は必要だったと思う。修行を進める目安になったし……。

だけど、今となつては疑問があると思う。尊師は、すべての魂をマハー・ニルヴァーナに到らせるまで修行を続けていくと言つてらっしゃる。もちろん、今生では完成しないけれども……。だけど、すべての魂が、いずれマハー・ニルヴァーナに到らなければならないのなら、すべての観念、すべての壁、それは宗教の壁なり、ステージの壁なり、そういうものを持っていかねばならない。であるならば、今の教団体質というのは、まさしく、小乗ではあるかもしれないけれど、大乘、あるいは大乘の上に立った秘密金剛乗の教えから考えていくと、超えられていない部分があると思う。

なんでこういうことを言うかというところ、いまだにステージというものにとらわれて、たとえば信徒さんが道場に入ってきたとき、カルマ交換になる、エネルギーの交換になると言つて嫌悪してしまうと。あるいは、外で仕事して帰ってきたら、上長の師が、「外の汚れたエネルギーを受けているから、札押の修行を一時間やってから、私たちの部屋に入り

なさい」とか言っている。

—— そんなこと言うんですか？ それはひどいですね。

高崎 俺もエネルギーは感じるからわかるんだけど、彼らは一種の嫌悪をしているんだよね。「私はあなたとは別なのよ！」っていう差別意識があると思う。

—— そんなこと考えているんだったら、オウムという教団が、一般社会から嫌悪されて当然でしょうね。

高崎 本来、「空（くう）」という悟りの意識状態、最終的な「四無量心」という心の状態は、自己と他の区別がない。その対象がどのような存在であろうが、嫌悪してはいけななんだよね。いずれすべての観念を、すべての壁を崩壊していかなきゃならない。

だけど、教団の多くの人たちは、警察やマスコミなどに対して明らかに壁を設け、嫌悪をしていると思う。あるいは差別の心があると思う。やはり、これは戒めてほしいですね。もちろん私もです。

そして、多くの人と手を取り合って「真理」を求めていきたい。

—— うーん。わかりました……。

高崎さんはどこからみても好青年だ。しかし、もっといろいろな人に会って、視野を広くすべきだと思う。あまりにも思い込みが激しすぎるように僕には見えるんだよね。もっと、一歩引いて考えてみる必要があるでは……。

……わたしは病んでいるときも、あるいは病気のときも、眠っているときも、起きているときも、絶えず修行のこと、瞑想のこと、それから人類はどのようにしたら済度されるだろうかということを考えています。ですから、たとえわたしが死にかかっているように、わたしの心というものは、あなた方に次はどのような法を説き、喜んでもらおうかなと、そして高い世界へ入っていただくように、どのように話そうかなということを絶えず思索しています。そして、これから話す内容がその一つであると。これはヴァジラヤーナの考え方ですから、あなた方の中には納得できないものもあるかもしれないけど、それについてはその前のヒナヤーナ、マハーヤーナの教学をよく行なって理解するようにしてください。

例えばここにだよ、Aさんという人がいたと。いいですか。このAさんは生まれて今まで功徳を積んでいたの、このままだと天界へと生まれ変わりますと。いいですか、ここまでは。じゃあ次の条件ね。ところが、このAさんには慢が生じてきて、この後、悪業を積み、寿命尽きるころには、地獄に落ちるほどの悪業を積んで死んでしまうだろうと。いいですか。こういう条件があったとしましょうと。

つまり、ここで出てくるのは天眼、来世を見つめる力、あるいは宿命、前生を見る力、あるいは漏尽、相手のカルマを完全に見つめる力といったような、いろんな神通力の要素がありますよと。いいですか。

じゃあ、次にだ。このAさんを、ここに成就者がいたとして、今殺したと。この人はどこへ生まれ変わりますか。天界へ生まれ変わる、その通りだね。しかし、このAさんを殺したという事実をだよ、他の人たちが見たならば、人間界の人たちが見たらね、これは単なる殺人と。いいかな。そして、もしだよ、このときAさんは死に、そして天界へ行き、そのときに偉大なる救世主が天界にいたと。そして、その天界にいた救世主が、その人に真理を説き明かし、永遠の不死の生命を得ることができたとしましょう、Aさんが。いいですか。このとき殺した成就者は何のカルマを積んだことになりましたか。

すべてを知っていて、生かしておくと思業を積み、地獄へ落ちてしまうと。ここで例えば、生命を絶たせた方がいいんだと考え、ポアさせた。この人はいったい何のカルマを積んだことになりましたかと。殺生ですかと、それとも高い世界へと生まれ変わらせるための善行を積んだことになりましたかと。ということになるわけだね。でもだよ、客観的に見るならば、これは殺生です。客観というのとは人間の客観的な見方をするならば。

しかし、ヴァジラヤーナの考え方が背景にあるならば、これは立派なポアです。そして、ここで大切なのは智慧なんだよ。智慧というのは、わたし先程何て言った？、神通力と言ったよね。智慧ある人がこの現象を見るならば、この殺された人、殺した人、共に利益を得たと見ます。OKかな、これは。ところが智慧のない人、凡夫の状態でこれを見たならば、「あの人は殺人者」と見ます。どうかな、これは。

じゃあだよ、ヒナヤーナ、小乗の修行をしている人が、殺すなかれの修行をしている人がだよ、例えばここにヴァジラヤーナのグルがいて、殺したとしましょうと。これはどうですか。この人は殺人を起したというふうに見ますか。この人は大罪を起したというふう

に見ますか。それとも功德を積んだというふうに見ますか。

そう、大罪を起^こしたというふうに見るよね。というのは、まだヒナヤーナではその教えがないから。つまり、現象に対して、何が功德になり、何が悪業になるかというところ、それは心の働き、それだけではなくて、正しくものを見つめる力なんですよと、智慧なんですよと、神通力なんですよということなんだよ。

じゃあ、はい、もう一つの例をあげようと。ここにAさんがいたと。いいですか、この人は、今死ぬならば地獄へ落ちるかもしれないと。いいかな。しかし、この人はこれから先、功德を積んで、最終的には天界へ生まれ変わるカルマがあつたんだとしましょうと。ここでまだ完成をしていない修行者がいたと。で、相手の人生を見誤つたと。今、ここで殺せばこの人は天界へ生まれ変わると。いいですか。そして殺したとしましょう。で、そのときの、その修行者の心は、この人はこれで天界へ生まれ変わるんだと思って殺したと。

しかし、この人はどこへ生きますか？地獄と。だとするならば、この殺した修行者は功德を積んだことになりませんが、悪業を積んだことになりませんか。悪業と。しかし、心の働きは相手を殺そうと思つて殺してますか、殺そうと思つていないで殺してますか。思つていないで殺しているよね。さあ、ということは何かというと、単に心の働きだけで功德になるものでもないよ。

どうやら本当の功德になるということは、ものを正しく見つめる力、その正しさというのは三世を見つめる力を背景として、その正しく見つめる力プラス心の働きなんだと。そして、心というものを背景に修行を進めていくのがタントラヤーナ、あるいはヴァジラヤーナの教えなんです。

でもだよ。聞いて何となく納得できるだろうけど、君たちにおいてね、その理解できない部分が出てくるよね。それはなぜかというと、今、この人を殺したら、どの世界へ生まれ変わるんだと。そしてその世界にはだれが住んでいるんだと。これが理解できていなければ、このヴァジラヤーナの実践はできませんか、できませんか。ということなんだよ。だから、これは大変に速い功德の積み方である、でしょ。

というのは、ここにいてる人を、今、人間界の低次元から天界へ行つた人は永遠不死、マハーニルヴァーナに入ることができるとしましょうと。そこに一人送り込んだわけだから、大変な功德を積んだことにならないですか。どうですか。

だから、そういう偉大な功德の積み方、これができるのがヴァジラヤーナであると、あるいはタントラヤーナであると考えてください。しかしだよ、それは最後にあなた方がなす修行であると。今は何をなさなきゃならないかな、修行としては。まず、布施、持戒、瞑想をなして初めて、次のステージの大乗の意味合いがわかるようになってきます。つまり大乗の真の意味合いというのは実践、小乗の実践をなして初めてわかるんだよということを理解しなければならない。……

巻末 参考資料②

『マハーヤーナ』三十六号（一九九〇年十二月号）より
麻原彰晃「前生の因縁——カルマの法則の恐ろしさ」

今回は趣を変えて、カルマの法則の証明を一つしたいと思う。このカルマの法則を完璧に理解し把握することは、マハー・ムドラーの修行者にとって不可欠な要因である。なぜならば、もしカルマの法則というものを確信できなければ、マハー・ムドラーによって生じる苦しみに耐えることができないからである。

私は、いくつか前の生で、一六〇四年に徳川竹千代としてこの日本に生を受けた。皆さんもご存じのとおり、後の三代将軍徳川家光である。この家光の業績を歴史的に簡単に拾ってみよう。

父、秀忠の死後、幕府の実権を握った家光は、貿易統制やキリシタン禁制を強化し、鎖国を完成させた。また、制度の整備に努め、武家諸法度の改定に際して、参勤交代の制度を定めるなど、諸大名の負担を重くし、諸大名の勢力拡大を抑さえ込んだ。

しかし、その重い負担は、結局は農民に転嫁されたわけで、家光の代になって租税の重圧に苦しむ農民一揆が各地で起こり始めたが、一六三七に起こった島原・天草一揆は特に有名である。ただし、これは単なる農民一揆とは様相を異にしており、家光の厳しいキリシタン弾圧と飢え死に寸前という二大要因が巻き起こした大一揆であった。島原・天草一揆は数か月で鎮定されたが、これは幕府の政治的権威を高めるとともに、キリシタン弾圧の強化をもたらした。また、大名・農民に対する武断主義からの幕政転換の必要を幕府に認識させ、以後幕政は文武主義へと移行してゆき、結果的に幕府は十五代将軍に至るまでの長期にわたって政権を保ち続けたのであった。

皆さんは、「おや？」と思われることだろう。それは、彼の行なった行為の中に、現在の熊本県とオウム真理教に関連したものがあからずである。

これは、二つ（三つと考えることもできるが）あるが、その第一に、現在の細川県知事は、家光によって熊本に転封させられた細川氏の末裔なのである。細川氏は外様大名であり、江戸から遠く離れた熊本へ置かれ、他の大名と同様、財政負担を強いられていたのである。そして、まさに今、この細川県知事が中心となって、オウム真理教叩きを行なっているのだ。例えば、波野村村長に、「法律違反となってもよいから、オウム真理教信者の転入を認めるな」と指示したりしているのが、彼なのである。

第二のポイントは、島原・天草一揆である。天草は熊本県にあるが、当時のキリシタンと同じように、今オウム真理教は特に熊本県で強く邪教呼ばわりされ、徹底的に叩かれている。しかも、オウム叩きのバックには、行政が絡んでいるのである。これはオウム真理教の存続が今の日本の国家的価値を揺るがすことを牽制したいがゆえの結果であろう。全く当時の弾圧理由と同じと言える。

ちなみに、島原・天草一揆のリーダーであった天草四郎時貞は、超能力を持っていたと伝えられている。

そして、もし最後にもう一つ現状と関連しているポイントを挙げるとするならば、家光が日蓮宗のある一派に対する弾圧を行ない、今、日蓮正宗信徒がオウム真理教の布教活動

の邪魔をしているということである。彼らは書店にあるオウムの書籍を置かないように圧力をかけたり、『真理の芽』の布施本を配布した家に、日蓮正宗信徒がオウム真理教の信徒と偽って高額のお金を要求したりして、嫌がらせをしているのである。

このような状況を把握し、理解するならば、私のまさに家光転生時のカルマ返しが、今生になって起きているとしかいえない。

では、私家光は、なぜその生において、そのような一見非道とも受け取られるような行為を行なったのだろうか？

私が統治するまでの日本は、貧窮、戦乱に明け暮れていた。ここで厳しい処置を取ることは、この二つにピリオドを打つことになる。私は判断したのであった。そして、私の統治以降、約三百年間にわたる平安の時代が続いたことは、周知のとおりである。

しかし、私家光個人としては、それらの殺生のカルマによって、最後の数年間、ルントラブル（風エレメントの乱れによって起こる心身の病氣）を起こし、この世を去ったのである。そして、これが私の転輪聖王としての役割だったのだ。

なお、今生引き続き起きているカルマ返しは、間もなく終息するだろう。それは、私のカルマがもうじき落ち切るとともに、反対にアンチ・オウムの活動をしている人間の悪業が満ちるだろうからである。つまり、今度は彼らが悪業によって身を滅ぼすだろうということである。

さて、このように読者諸氏が、私のようにカルマを見極められるレベルに達したならば、諸現象の苦楽に対して頓着しないようになるだろう。そして、その状態こそがマハー・ムドラーの成就を支える土台の一つとなるのである。

一九九四年三月二十七日 麻原彰晃 オウム杉並道場における講話より

……ところで、今日の話は皆さんにこのような原則的な話ではなく、少し高度な智恵のある話をしたと考えている。したがって今日のこの話はこの信徒の中でも理解できない人がほとんどかもしれないが、わたしとしては法則を残さなければならぬ立場にあるから、皆さんに特別な法則の伝授をしたいと思う。それは何かというと、ヒナヤーナ（小乗）、マハーヤーナ（大乘）、タントラ・ヴァジラヤーナ（秘密金剛乗）におけるものの考え方の違いである。

もともとヒナヤーナのものの考え方というのは、先程述べた離愛著、現象から離れることをポイントとする。この現象から離れることによって、カルマの悪業から来る苦しみと苦悶を経験しなくてすむ状況を作り上げると。そして、もともと本来持っているわたしたちの真我の特性によって解脱をするという方法である。

第二のパターンはマハーヤーナ的な方法である。このマハーヤーナ的な方法は、この世界の構成要素を考え、そして善行や徳行を行なうことにより高い生命体へと至ると。高い生命体へと至ることにより智恵を磨くことが容易となり、そして高い智恵を有するようになる。高い智恵を有するようになって、よりいっそう現象に対する理解が強まり、そして解脱するという道である。

第三番目はタントラ・ヴァジラヤーナの方法である。タントラ・ヴァジラヤーナの方法とは何かというと、この宇宙の構成要素とはこうである、人間の本質的な功德と呼ばれるものは原理的にこうである、ということをはつきりと提示を受け、その提示によって真理とはこうだという実践をする修行である。

まず「財」について考えてみよう。ヒナヤーナにおける財の考え方は、離愛著ゆえに放棄である。放棄とは何かというと、財を持たない、そして財を持つことによる貪りの生起等を徹底的に捨断する実践である。これがヒナヤーナにおける財の考え方である。

ではマハーヤーナにおける財の考え方とはどうかと。マハーヤーナにおける財の考え方は二つある。一つは自分が功德を積まなければならないから、一生懸命財を集め、財を稼ぎ、そしてそれを布施するという道である。第二は、例えば財で困っていて、そして真理の実践ができない人に対して、それを恵み与えるという方法である。これがマハーヤーナの財の考え方である。財とは財産の財ね。

では、タントラ・ヴァジラヤーナにおける財の考え方とはどうであろうかと。これはラトナサンバヴァの法則と呼ばれる法則がある。ラトナサンバヴァの法則とは何かというと、もともと財というものは個人に帰納するものではない、帰納とは個人がそれを所有する、そしてこれはわたしのものであると呼ばれるものではない、と断定する。なぜ断定できるのかと。それは死ぬとき持っていけないではないかと。あるいは無常を根本とし、増減するではないかと。あるいは悪業をなした人も一時的に財を多く得ることができるじゃないかと。したがって、財というものは善でも悪でもなく、しかもそれは個人に帰納されるものではないんだと考える道である。ではこれに対して、ラトナサンバヴァ、つまり黄色い真理勝者方はどうお説きなるのかと。財は善、あるいは徳のために使うべきであると。財は悪のために、あるいは不善不悪のために、つまり善でも悪でもないもののために使う

べきでない。そして、善・徳のために、もし財を使うことができるとするならば、それは盗み取ってもいいんだという考え方である。

ここで一つ問題が出てくる。それはヒナヤーナにおける不偷盗の戒と財を盗み取っていいんだと考えるラトナサンバヴァの教えの矛盾である。しかし、この矛盾については簡単である。先程述べたとおり、まずヒナヤーナにおける不偷盗の戒と呼ばれるものは、この人が離愛著し、そして低級靈域に入り、そこから人食い鬼神、神聖神、そして大神聖神、光音天へと至る道を歩くための実践である。一方ラトナサンバヴァの場合、先程述べたとおり、財というものはだれのものでも本来ないと。そして善にそれをもし化すことができるならば、それは奪い取ってもいいんだと考える。そして、それは功德であると考え、その記憶修習ができるかどうかによって違ってくるということになる。したがって、この戒律対ラトナサンバヴァの教えというのは矛盾しないのである。つまり、それはその人がどの程度智慧を有するのか、その人がどの程度真理というものを悟っているかによって違ってくるのである。

次は。いいですか、この法則はダライ・ラマ法王もお説きになりたかった法則だが、しかし、ダライ・ラマは人間の知性があまりにも低いがゆえにお説きならなかったとわたしは考えています。それゆえにチベットは滅んだんだと考えています。

第二はヒナヤーナにおける不殺生の戒と、それからマハーヤーナにおける生命延長という意味と、それからアクショープヤの教えについて法則を説かなければならない。この不殺生、それからマハーヤーナの教え、それからアクショープヤの教えについては、相当にこの教えを理解する場合、智慧を有するということができる。というのは、ヒナヤーナとそれからタントラ・ヴァジラヤーナは真つ向からその教えの本質、つまり解脱のシステムというものが対立するからである。

まず、なぜ不殺生をした方がいいのか。これは不殺生を行なうことにより、つまり、殺生しない戒律をじつと守り続けることにより、多くの魂に苦しみを与えないということがある。したがって、わたし、あるいはわたしの弟子たちは小さな生き物、大きな生き物に対してこの不殺生の戒律を守ると。したがって例えば毒ガス攻撃を受けたとしても苦しまない。そして、最も大切なことは、その生から死へ、小さな生き物にしろ至らしめるときに意識の断絶が起きると。その意識の断絶イコール瞑想の断絶につながる。したがって、この不殺生の戒律というものは素晴らしい戒律であるということが出来る。

ではマハーヤーナにおいては、この不殺生についてどう考えるのかと。単純に殺生しないだけでなく、他の生命体を喜ばせ、そして生命を長引かせる努力をすると。それによって自身自身の寿命を長引かせると。これが不殺生、そしてマハーヤーナにおける生命延長の実践ということになると。

では、タントラ・ヴァジラヤーナにおいてはどうか考えるのかと。タントラ・ヴァジラヤーナにおいてはアクショープヤの法則というものが存在する。アクショープヤの法則とは何かというと、その生命体にとってどの時期に死ぬのが一番輪廻にとってプラスになるのかという実践である。つまり、例えば毎日悪業を積んでいる魂がいるとしよう。この魂は十年生きることによって地獄で十億年生きなきゃならない。とするならば、例えば一年、二年、三年と長くなればなるほど、その次の生の苦しみは大きい。したがって早く命を絶つべきであるという教えである。つまり、不殺生の戒と、このアクショープヤの戒律と

いうものは真つ向から対立することになる。しかし、カルマの法則から見れば、両方とも正しいということが出来る。ただ、見ている点が違うんだと。

つまり、ヒナヤーナの戒律においては自己の身体の苦痛というものをポイントとして見ている。タントラ・ヴァジラヤーナにおいては自己の身体の苦痛ではなく、自分自身の輪廻転生、つまり意識は乗り物の主であり、そしてその乗り物の主は乗り物を移し変える、乗り物から乗り物へと移し変えるときの中心であるから、その主の道が外れないようにすることが必要なんだと考える。したがってこの肉体の苦痛よりも輪廻を重視すると。これがアクシヨープヤの戒律の本質であると。

第三番目はヒナヤーナにおける不邪淫の戒と、マハーヤーナにおける慈愛と、それからタントラ・ヴァジラヤーナにおけるアミターバの戒律の対比をする必要がある。まず、ヒナヤーナにおける不邪淫の戒というものは、邪淫を行なうことによって自分自身の血流が性器に集中し、スヴァディスターナに集中すると。しかもそれだけでなく、例えば他人の妻、一般的には他人の妻を盗むことを不邪淫の戒に触れるというわけだが、他人の妻や他人の夫を盗むことによってその人の意識状態というものは、それを保持する魂の、つまり例えば妻や夫、特に一般的には経済的な面倒を見られているかどうかのポイントになるわけだが、その経済的な面倒を見られている魂のカルマを受けることになるから、これは動物界に落ちる。ゆえに不邪淫の戒は守るべきであると説くと。

マハーヤーナにおいてはどうかというと、多くの人に多くの愛を注ぐと。しかし、ヒナヤーナにおける戒律というものは原則的に守られると。

では、アミターバの戒律はどうかと。ここでいうラトナサンバヴァ、アクシヨープヤ、アミターバ、アモーガシッディ、ヴァイローチャナという五仏はこれは戒律である。戒律であるというのとは何かというと、タントラ・ヴァジラヤーナにおける原則的な思考ということになる。

これは、その魂にとってその伴侶が、あるいは恋人が、真理というものを考えた場合、その真理に対して益するのか、益しないのかということがポイントになる。例えば、妻に引っ掛かり、夫に引っ掛かっている場合、それは真理の実践から見ると、非常に障礙になるわけだが、もし、その場合は盗んでもいいということになる。というよりも積極的に盗め、という教えが存在するのである。これは何を意味しているかというと、先程も述べた、カルマの法則というものがすべてをこの五仏の法則においては、基本の修行者の考え方になっているのである。ではそれはどういうことかと。例えば、愛著し喜び合うこととは徳の現われである。これは素晴らしいことである。しかし、愛著し喜び合うことにより、例えば真理を実践しないということとは、その魂は、次の生において動物界へ転生するかもしれない。したがって、その魂のカルマを最も高い状態で輪廻させるために、魂にとって順縁の偽になっているものを奪い取るのである。これがアミターバの法則と呼ばれるものである。

次は原因の道と呼ばれるヒナヤーナと、それから中間の道と呼ばれるマハーヤーナと、それから結果の道と呼ばれるタントラ・ヴァジラヤーナの大きな違いを表した教えが存在する。これは何かというと、アモーガシッディの法則と呼ばれるものである。例えばヒナヤーナにおいては、少しずつ善を積み上げる、少しずつ徳を積み上げるということを行なう。

しかし、例えばアモーガシッディの法則になると、どうなるかというと、結果のためには手段を選ぶ必要がないと説くのである。なぜならば、もともとこの五仏の実践を行なう魂は、本質的に真我独存位であり、そして真我そのもののの中に五つの仏陀の種子というものは存在しているわけだから、その五仏の実践を行なう魂のすべての行為は肯定されるべきである。したがって、早く結果を出し、結果を出すことにより世の中に大きな影響を与え、世の中に大きな影響を与えることにより、多くの衆生を済度しなければならぬといふのである。これがアモーガシッディの法則と呼ばれるものである。つまり、結果のためには手段を選ばないということである。

最後にヴァイローチャナの法則というものが存在する。しかし、このヴァイローチャナの法則と呼ばれるものは、一般的に、まあ、ここであなた方に話したとしてもね、この日本では決して実践できないものであるから。例えば、それは象の肉とかいろんな肉が必要になってくるわけで、できないからここで割愛させていただきます。

したがって、わたしが今日言いたかったことは何かというと、自分自身がどのスタンスの修行を行なうのか、それはヒナヤーナなのか、マハーヤーナなのか、あるいはタントラ・ヴァジラヤーナなのかによって方法および結果が違ってきますよと。

この法則については、わたしはわたしがオウム真理教を始めて、説こう説くまいかずつと迷った内容だ。というのは、もともとあなた方が教育を受けていない魂であるとするならば、この法則は簡単に説くことができる。しかしあなた方は教育という觀念の枠組みを自分たちで作り上げている。その教育という觀念の枠組みは何を意味するのか。まあ、もともと教育とは国家体制を維持するためにあるわけだが、それによって例えばこのタントラ・ヴァジラヤーナの法則の真実の姿というものが誤解される可能性がある。

しかしだよ。もうわたしの生命というものはいつ途絶えてもおかしくない状態にある。だとするならば、今までわたしを信じてきてくれたあなた方に対してこのタントラ・ヴァジラヤーナの五法の中の少なくとも四法についてはお話しをしておく必要があると考えたのだ。

したがって、もう一度言うならば、ヒナヤーナは個人の立場に立っていると。それからマハーヤーナは個人とそして周りの人を救済する立場に立っていると。タントラ・ヴァジラヤーナはこの宇宙の秩序、そしてカルマの法則を維持する、そういう立場に立っている。つまり、宇宙の秩序を維持する立場、救済者の立場、救世主の立場に立っている法則であると理解してほしい。……

……最近の尊師公判での出来事によって、動揺している信者がいるのではないかと思ひ心配しています。尊師を強く批判する（元）高弟や、尊師が退廷させられた件（尊師の言動が教祖らしくない、不真面目、狂っていると報道された）によって、疑念が生じたりしていないでしょうか。それについては、私は次の通り考えています。

まず、尊師のご説法にある通り、全ての出来事はカルマの法則にのっとっていて、良いことも悪いことも心が生じさせており、すべて心の現われである、というのが仏教の根本法則です。つまり私が何を経験するかは私たちの中にその因があつて、外にはないということになります。

今や日本中の人が尊師を知っていますが、私たちには偉大なグルとして映った人が、凶悪犯の教祖として一般の人には映っています。この違いも全て、カルマの法則によるものなグルと感ぜられる経験をしますが、悪業多き、真理を否定してきた魂は、尊師が偉大をする機会がないのです。そして、今はカーリー・ユガの時代であり、大半の魂のカルマは大変悪く、彼らが尊師と接するマスコミ報道や公判においては、彼らのカルマに応じた尊師が映し出される、生じるのです。

すると何故高弟になる程のカルマを持った弟子たちが、一転して尊師を批判したりするのかという疑問が呈されるかもしれませんが、これは彼らの有しているカルマが単一ではなく、色々なカルマが混じっているからであつて、やはりカルマの法則にのっとった現象なのです。

弟子のカルマについて言えば、過去世においては尊師をグルとしたいわゆる「順縁」の生ばかりではなく、例えば敵対関係であつた「逆縁」の生もあるのです。そして、逆縁という形で縁が生じ、それをきっかけにして、その後弟子という順縁に転じていくというプロセスが重要な救済方法の一つとさえ言うことができます。

そのよい例がサキヤ神賢（お釈迦さま）に対抗したデーヴァジッタですが、過去世において王として、当時修行者だつたサキヤ神賢を殺すなどの逆縁を形成したデーヴァジッタは、サキヤ神賢が真理勝者の生では、高弟となり、その後過去世のカルマで神賢と敵対し、教団分裂を引き起こし、地獄に落ち、そこで神賢に心から帰依することを誓い、再び修行者に生まれ変わることができたというプロセスをたどっています。かなりの高弟となつて敵対したところや、神賢が墮落した、煩惱的になったと批判したところなどは、現在の状況とそっくりですね。

逆縁による救済についてお話ししますと、尊師は私に「被害者の会の親たちは未来際、私の弟子となるだろう」とおっしゃったことがあります。尊師によると親たちは尊師を強く憎んでいるが、その結果尊師に強く集中しているため、尊師とのデータ交換が、すなわち縁が生じ、来世に真理に導かれるそうなのです。もちろん、憎しみではなく帰依心を持つて集中することができればベストなのですが、何の集中もなければ何の縁も生じず、最悪なのです。よつてサキヤ神賢は「縁なき衆生は度し難し（救済できない）」とおっしゃったのです。それでチベットのタントラ經典の中には、真理と縁を作るために（他に手がなければ）菩薩に対して石を投げて逆縁を作れという教えもあるくらいです。

この逆縁というのは、多くの弟子にみられるもので、今裁判で敵対している弟子が特別なわけではありません。例えば帰依の見本のようなだったマンジュシュリー正大師（注：村井秀夫）も、過去世において尊師に対し刺客だった生があり、また、これもまた帰依の強いミラレバ正大師（注：新実智光）が、尊師の敵軍の将であり、その戦いをきっかけとして帰依するようになった話は有名ですね。私も、その生で、敵軍の子供で、その戦いで親が戦死するといった意味で逆縁を形成したのです。その後尊師に引き取られ、育てられた面、順縁もあります。

こう言う逆縁のカルマはかなり多いのですが、救済とはそもそも汚れた欲界で行なわれるものであり、特にカーリー・ユガの時期の救済は、社会全体が汚れているため、順縁を使った救済は効果がとぼしいのです。その一方で、救済者は汚れた社会に妥協しませんので、そこで多くの魂と対立的関係、逆縁が生じます。そして、その後、逆縁を使いながら救済していくのです。もちろんこの対立も人々のカルマの現われ、過去において真理を否定する等の悪業がなければ生じないのです。

このように、菩薩の救済活動は、救済される側のカルマに応じて、尊敬すべきグルや、憎むべき敵、軽蔑の対象等に菩薩を映し出しながら、順逆の強い縁を結んで進んでいきます。ここで大切なのは、菩薩がどのように映るかは、人々のカルマに応じて現われた幻影であり、菩薩の実体は透明で広大な四無量心以外の何物でもありません。それは、逆縁によって一時的に失われる安定、名誉、権力、等々には全く頓着せず、ひたすら救済の成功を求めている心です。

尊師が公判初日に、「私は逮捕される前から、そして逮捕されたあとも、一つの心の状態（四無量心）で生きてきました。……」と言われたのは、尊師の実体を表していらつしやいます。尊師を敵対している弟子が、具体的にいつのカルマによって敵対しているかは、まだわかりませんが、私たちがまず理解すべきことは、高位の菩薩の救済活動においては、逆縁が形成され利用されることであり、よって現在、私たちが動揺すべきことではないのです。ノストラダムスの予言詩の中にも、「十字架の半神が様々の闘争によって狂気の様子から一つのものに（闘争の形を取りながら、最後に聖なる実体を現わす）」というものや、「多くの信者が真理の法則を汚す……その時神秘的性質のものは艱難を受ける」といった予言がありますから、現在の敵対関係は予言の成就でもあるのです。

さて、私たちが今の状況、情報によって疑念を持つことがあるとしたら、どうしたらよいのでしょうか。疑念は観念によって生じます。つまりグルはこうあるべきだこうあってはならない等々の思い込みです。そして、グルに関する情報がその思い込みに反していると、疑問が生じるのです。よって同じ外からの情報があっても人によって、疑念が生じたり生じなかったりします。つまり疑念もカルマの現われです。

そこで、まず第一に修行によって観念や外的情報を超えた経験をしてみたらどうでしょうか。つまり、私たちが尊師を意識したり、観想したり、伝授された修行を行なったたりした時、私たちが煩惱が弱まったり、エネルギーが上昇したり、意識状態が高く透明になったり、經典上の体験をしたりするのなら、いかなる外的情報があったとしても、尊師は真理・聖と言えるのではないのでしょうか。私たちが死んだら、マスコミも観念もついてこないし、助けてくれませんが、聖なる意識状態は来世にも持っていけるし、高い世界の転生の決め手になる絶対的なものです。

私の体験としては、尊師への帰依を強めよう意識するとき、よく透明で輝くブルーの光を見ることがあります。この光は『色別恋人判別法』にある通り、「三宝に心から執着している」時に発せられるもので、私が尊師を三宝であると確信する一つの理由になっています。

第二に、私たちは、自分たちの真理の実践とカルマの法則にもっと確信を持つべきではないでしょうか。カルマの法則によれば、聖なる弟子には聖なるグルが与えられ、聖なるグルは聖なる弟子が与えられるのですから、聖なる弟子は必ず聖なるグルと巡り合うのです。よくいう「類は友を呼ぶ」とはカルマの法則を表しており、似た者同志が集まるから、六つの欲界が六つのカルマによって形成されるのです。

よく新興宗教にだまされたという話があり、現在のマスコミはオウムをそれらと一緒にしていますが、それは間違っています。だまされる場合は、だまされる側にだまされるカルマ、汚れたカルマがあるからですが、ほとんど新興宗教は現世利益を説き、欲望の多い、汚れたカルマを持つ魂を集めるのです。

しかし、尊師は、オウムは、現世利益を説かず、汚れを捨て、解脱・悟り・救済を求める清らかな魂を集めました。もちろん他の団体を経験した人もいますが、皆現世を捨て、厳しい戒律のある出家生活に入ったということは、彼らの中心的カルマは清らかでないはずがありません。そして、極限の布施、奉仕と他に類をみない極厳修行など、現在の世界で最もハードな修行をしてきました。これはプライドでも何でもなく、私がインドや他の仏教国を見た結果、考える事実であり、尊師のご説法にもあります。そして、多くの人が思い出しているように、これは前生からのものでもあります。このように聖なるカルマを形成している私たちが巡り合ったグルが聖でない、真理でないわけがないのです。それはカルマの法則、全宇宙の王たるシヴァ大神とすべての真理勝者の説かれる絶対の法則上ありえないのです。このように、まず私たちが、私たちの外にある情報ではなく、私たちの内側の体験や私たちの実践してきたこと自身を信すべきなのではないかと思うのです。

第三に、観念の捨断、そして捨断のためのザンゲをすべきだと思えます。あらゆる観念は私たちが目指している真我Ⅱマハーニルヴァーナのものではありません。真我は広大な純粹な光の世界であり、観念や思考といったものではないのです。そして、今生培った社会通念や観念は、死んだら無効になる一種の幻影なのです。よって四念処で「諸法無我」、諸々の観念（識別）は捨断すべきものとされています。つまり真我に到達する上で妨げになるのです。観念を超えるためにグルに帰依したのに、観念によってグルを否定したら、成就しないのはカルマの法則通りです。

しかし、十戒等の教えも観念ではないか、何故グルはそれを与えるのかという疑問が生じるかもしれませんが、それは、最終的に一切の観念から離れるための過程において必要な観念なのです。川の向こう岸に渡るために船が必要でも、向こう岸についてしまえばもういらないようなものです。よって小乗や大乘から金剛乗と、修行レベルが高くなる程、法則も非観念的になり、例えば小乗の戒律が必要なくなっていくのです。そして、グルが教学、グルが瞑想という考えが尊師のご説法にある通り出てくるのです。

観念を超えてグルに帰依した代表例がナローパでしょう。ナローパのグル、ティローパは、当時乞食で、付近の人は誰もグルと思っていませんでしたが、清らかなカルマを持つナローパは、観念に負けず帰依し、その後ティローパの与えた、生命さえ危なくす

る狂気じみた指示に従い続け、完全解脱をしたのでした。ナーローパの帰依に比べると、私たちに求められている帰依など遊びのようなものかもしれせん。

また、ナーローパの弟子マルパも、その弟子ミラレバに対し、酒に酔ったふりをしたりして、支離滅裂とも、理不尽とも言える指示を繰り返し、ミラレバは疑念に悩みつつもそれに耐え続け、最後は自殺をはかるほど苦しみましたが、これによって大半の悪業が取り除かれ、その生で完全解脱に至ったことも有名な話です。

苦しみながら帰依することは、悪業の清算となりますから、一生で解脱を目指すヴァジラヤーナ、マハムドラーの教えでは、一生という短い期間に悪いカルマを落とすため、弟子は大いなる試練、苦境を与えられます。そこでそれを与えるグルに疑念を持たず帰依できるかがポイントとなるのです。よって私たちは今の逆境を喜びとするべきなのです。なぜなら最速の解脱の道を歩んでいるからです。

さて、世の中の動きとしては、ある時点までは悪がはこびり、その後、善が強くなり、ついにはキリストの登場、千年王国に至ると予言されています。この逆転は、もちろん予言をなした、シヴァ大神やすべての真理勝者方の意思、祝福によつて生じるのですが、その予言において弟子たちはキリストを助ける重要な役割を与えられています。そして、そもそも、千年王国の恩恵を受けるのが弟子たち自身であることを考え合わせるならば、私たちがそれにふさわしいカルマ、心を有すべく努力をすることは、現象を逆転させる上で極めて重要であると言えないでしょうか。そして、それはもう目の前のことなのです。

私たちは今、帰依しにくい環境にあります。それは過去のカルマによつて生じた煩惱や観念が邪魔している結果です。ですから、今帰依することは、私たちのカルマに打ち勝ち、それを落とすことになり、以前よりはるかに強い帰依、ステージに至ることになるのです。尊師のご説法に、逆境の時の帰依は、平時の一万倍もの力があるというのがあります。そしてこの強い帰依心、集中による思念の力が悪しき心の現われに打ち勝つて、現象を好転させるのではないのでしょうか。つまり、すべては心の現われ、心が生じさせているものなのです。私たちの尊師をグルとして、キリストとして、世の中に現わすことができるかは、私たちの心がどのくらい強く、尊師をグルとして、キリストとして信じ続け、それに基づく帰依の実践をなすかが重要だと思ふのです。そして、今の逆境は、その強い帰依心を培う手助けをしてくれるのです。なぜなら、逆境でないときは煩惱や観念であっても、帰依しているつもりでいられたが、逆境によりそれができなくなり、ついには浄化され、真のグルへの集中、真の帰依が培われる機会を得るからです。

去年の三月二十三日、逮捕前の最後のご説法で尊師は次のように言われています。「君たちは五感にとらわれてはならない。通常の思考にとらわれてはいけない。…マスコミにとらわれてはいけない。…そしてグルが居、偉大なる完全なる絶対なるシヴァ大神と完全なる覚醒を達成なさつたすべての真理勝者が存在していらつしやることに確信を持つべきである」と。そして、逮捕となった時も、「今、修行をしています。結果が出るのは少し時間がかかるでしょうが、すべては心の現れですから」とおっしゃったそうです。

チベットに伝わる有名な話として、仏陀への帰依の深い老女に、息子がただの石を、仏陀ゆかりの聖石と偽って渡したところ、老女がその石に対して一心に祈りを捧げ続けているので、石に仏陀の加持力が宿り、本当の聖石となったという話があります。この話は、聖なる心に対して、聖なる現象が現われ、神々の祝福があることを示唆しているのではないで

しょうか。

すべては心の現れ。未来は私たちの心が生じさせるもの。言い換えれば、未来は私たち
の心の中にあるのです……

おわりに

ロフト出版編集長の三浦小太郎さんは、チベット仏教ゲルク派の修行者である。オウム事件を巡って話をする機会があり、その後、彼から次のような手紙が送られてきた。なかなか本質を突いた解釈なので、ここに掲載させていただく。

……現在でも明確にされていないのは、オウム真理教が（そしておそらく麻原氏の指示のもとで）なぜ地下鉄にサリンをばらまいたかという、最も根本的な疑問です。上祐氏のテレビ等での弁明が一時期それなりの説得力を持ったのも、「サリンを撒いて、オウムに何の得があるのか」「動機が全くない」という彼の主張を百パーセント反論することはできなかったからでしょう。

現在、最も有力視される解釈は、九十五年十一月の「最終戦争」（日本国家との開戦）を指していた麻原氏が、そのための資金・信者（兵士）集めをさせるあまり、仮谷さん拉致事件等を引き起こし、警察の捜査によってサリン製造やドラッグの使用が明るみに出ることを恐れ、捜査を攪乱させるためにサリンを撒いたという、一種の被害妄想・自己破壊型の行動だったとの説です。

たしかに、どんなにすぐれた人間でも、追い詰められた時は愚かな行動に走ることはありうる。しかし、たとえそうであったとしても、直接サリンを撒いた信者たちが、ただそれだけの理由で無差別の大量殺人を引き起こせるのだろうかと疑問が起きます。少なくとも、単に捜査を混乱させてグルと教団を守るといふ、それだけの（信仰者にとって「それだけ」ではもちろんないでしょうが）理由で、殺人を犯してはならないという仏教の小乗戒も、大乘の四無量心の精神も振り切ることができるものでしょうか？

ここでよく論じられるのが、「ボアの思想」、つまり「悪行を重ね続ける人間を成就者が殺し、その魂を逆に救う」という麻原氏の思想です。しかし、これでは、たとえば坂本弁護士事件のように、（麻原氏にとって）明確な「真理の敵」を殺す場合には当てはまりませんが、オウムにとって敵でも何でもない人々を無差別に殺す行為は正当化しきれないものではないと思います。

私が思うに、この事件は「マハムドラー」の修行・思想が、実行犯だった信者たちをかなり呪縛していたのではないのでしょうか。チベット仏教本来のマハムドラーの思想はともかく、オウムにおけるマハムドラーの思想には、サリン事件を正当化してしまう面がたしかにあると思います。

マハムドラーは、オウムにおいて（チベット仏教においても）最上位の修行、教えに位置づけられています。修行経験のいくつかを読む限り、修行プロセスとしては次のようになると思われます。

①マハムドラーとは、世界の一切を「大いなる空（くう）」とみなす高度な密教修行であり、ヨーガの修行体験、精神のコントロール（これはいわゆるマインドコントロールなどという低次元のものではなく、たとえば六道輪廻をはっきりとイメージできるといった瞑想修行の技術を指す）や、信者を指導する等の経験をかなり達成し、高いステージにある信者に対してのみ課せられる、いわば「修行を越える修行」である。

②まず、グルは弟子に対し、徹底的な「観念（概念）崩し」を行なう。弟子はこれまでの修行体験によって、一般社会の常識や価値基準、欲望（煩惱）、市民道徳等の「観念」は既に崩されているが、ここで崩されるのはその上の、オウムで得たはずの価値、体験、信念である。

③グルはまず弟子の精神を追い詰めていく。体験記によれば、男性信者に対しては「ブライド崩し」をかけるパターンが多い。彼の宗教的達成、体験の価値、教団内で成し遂げた業績を、グルはことごとく「そんなものは無価値だ」と否定していく。（逆に彼の失敗についてはそれを突き付けていく）

女性信者の場合は、おおむね「ジェラシー」「性」「恋愛」を「ザンゲ」させるパターンをとる。これまで彼女がグルにすら隠していたこと、また「煩惱」として切り捨てたつもりで無意識に沈めていた感情をすべて吐き出させ、精神的に追い詰めていく。

④この過程で、弟子は精神的危機に陥る。入信以前の自分の経験は出家とともに切り捨て、「再生」したはずの自分が、今度は入信後のすべてを否定されていくわけだから。

この危機に耐え、狂気＝魔境に陥らないためにグルが提示するのが「絶対帰依を行なえば、私は必ず弟子をそこから救い出す」というメッセージである。崩壊していく宗教的自我を「帰依」の中で狂気から救う。

⑤この段階を耐えぬくことによって、社会だけでなく、自己だけでなく、修行も宗教もすべてが「空」であるという「マハームドラー」の修行が達成される。これが小乗・大乘を超えうる境地であって、究極の悟りに向けてのステップとなる。

大ざっぱに書いてみましたが、この「マハームドラー」の修行を全的に受け入れる限り、サリン事件は次のように解釈されうると思います。

①サリン事件は小乗・大乘の教えでも（おそらく秘密金剛乗の教えによっても完全には）正当化しえない行為である。しかし、マハームドラーの修行として受けとめれば、以下のようになれる。

②まず、「生命は大切」という道徳観念は、入信・出家とともに「輪廻を知らない考え」として否定される。

③「慈悲・慈愛」という大乘の理念も、「それは実は観念に過ぎない」とされる。

④「しかし、このような行為が許されるのか」という苦悩・精神的危機は、これまでの修行と同様、「絶対帰依」によって乗り越えるしかないとされる。

⑤ここでもう一つ、「救済」という問題が提起される。現世の人々は「死」を忘れ、快樂と煩惱に耽っている。この社会に「死」の絶対性を突き付けることによって、今味わっている快樂がいかに虚しいものであるかを悟らせることが、この社会全体に対する「マハームドラー」「観念崩し」になりうる。残念ながらカリー・ユガ、末法の時代には、このような方法によってしか衆生を覚醒させることはできない。

ここに、サリン事件＝マハームドラー＝救済の構図が生まれる。

この①～⑤は、おそらく弟子の内面で展開され、グルが押し付けるものではない。逆に言えば、ここまでオウムのマハームドラーの思想が精神に確立している者、すなわち高弟

しか実行犯には選ばれない。

以上が私なりに考えてみた、サリン事件の教義的解釈です。もちろん、これほど単純なものではなく、さらにいろいろな事件の教義的正当化があります（たとえば、タントリズムの一部では、修行をある程度達成した修行者はあえて破戒をなすことによって次のステップへ行く、という考えがあり、その破戒は殺人も含まれかねない）。あるいは、もっと単純にグルイズムだけで解説できるかもしれません（グルがすべてであって、他のことは考えるに値しない）。

おそらく麻原氏の心の中にも、単に捜査攪乱を狙うだけでなく、日本全体にマハームドラーをかけようという思考はあったのではないのでしょうか？

実はこの事件について、なかなか魅力的な解釈だと思ったのは、劇作家の山崎哲氏が「サティアン」という芝居の中で提起したものでした。それはグル麻原が、初期の「オウム神仙の会」時代の、グルと弟子の関係をもう一度取り戻すために事件を起こしたというもので、教団という組織によってグル自身が阻害されていくというテーマには興味深いものがありました。……

三浦氏はチベット仏教の経典をかなり読みこなしており、ゲルク派（ダライラマ法王の系統）の教えだけでなく、カギユ派（マハームドラーを至上とする）の教えも知悉している。オウム真理教という教団には全く関係なかった彼のような人の口から、こういう解釈が出るならば、オウム事件の本質はやはりチベット仏教にあるのだろうか？

しかし、どう解釈しようと、オウムの起こした事件は失敗だったと、わたし猪瀬は思うのである。ポアだろうが何だろうが、この現実においてたくさんの人々に苦しみを与えたのは間違いないし、そして実行犯だった信者の多くも涙を流し後悔している。オウム真理教も瓦解寸前だ。何の発展性もなかったのである。高崎氏や現役信者のように「正しかった」と思い込むことは僕にはできない。

高崎氏がこれからどうなるのだろうか？ 再会してこのかたずっと彼に疑問をぶつけ、転向を促しているのだが、突き進もうとする彼は止められない。まあ、高崎氏は一般の現信者のように閉鎖的になろうとせず、たくさんの人と会おうとしているので、それが彼の思い込みを氷解してくれるのではと期待しているのだが……。

参考資料には、公安調査庁が破防法適用の証拠として提出している、麻原彰晃の講話の箇所をあえて掲載させていただいた。この箇所は現在のオウム真理教も必死に隠しているもので、現在ではなかなか見ることのできないものだからである。H・Jの文章とともに、オウム・マインドコントロールの核心を突くものと思う。

この本が材料となり、オウム・マインドコントロールの解明が一步でも進み、それを乗り越える方法が提示されるようになれば、わたし猪瀬の最大の喜びです。

一九九七年二月十五日

猪瀬正人